

源氏物語における終助詞カシ

小原 ひと希

ある作品の表現を理解するためには、まず、その言語現象を把握する必要がある。しかし、それだけでは、文意が把握されるだけで作品の解釈につながらないことがある。そのため、作品に関する背景知識や歴史的価値観を踏まえた考察を行わねばならない。前者は語学的なアプローチであり、後者は文学的なアプローチである。表現を解釈するとき、両者は相補的な関係にある。この二つが揃ってはじめて、表現の解釈は可能となる。

ところが、語学研究と文学研究は、それぞれの目標において異なる特性を持つ。語学研究は、一般的なパターンや規則を明らかにすることを目指し、一般化した知識の具体的な応用に主眼を置いている。一方、文学研究は個々の作品やその解釈に重点を置き、それぞれの作品の個性を探求することが主な目的である。かかる意味で、両者には研究における目的の不一致が認められる。したがって、両者の違いを認めただけで、文学と語学の両分野間の生産的な対話と交流が必要である。より具体的に言えば、文学研究者は言葉のメカニズムにより注意を払うべきであり、語学研究者は自分たちの一般化した知識の具体的な応用に関心を持つべきである。全体的な視野と個々の作品の深い理解が結びついたとき、どのような世界が見えるか。本発表では、源氏物語における終助詞カシに注目し、語学的アプローチと文学的アプローチによる表現解釈の可能性を示したい。解読困難な部分を適切に解析することを目指しているため、科学的な観点から対象を合理的に定義した上で、表現を考察する。本研究は表現の解釈を目的とする性質上、個々の事例の質的研究が主となるが、それを補完する形で量的研究の手法の活用も視野に入れている。これによって研究の再現性を担保することができ、両分野をつなげることも可能だと考えられるからである。